



題

麥林舍發句集

排款去人有之而音微甚負德  
 始多用巧也此作者能競斯  
 補劍體其而後稍取之材而

不變其格以上蕉為澹  
然一彬二然蓋乃今而辨則已  
怪也人各握靈珠玩弄為檀  
昆玉嗜海東者不遑之救也  
麥林舍主人壯歲有譚癖老  
而不倦弄月嘲風錄情而

倚靡體物而瀏亮有之敢  
當于述作之其適足以效  
澹二彬二已支

蕪羽林

麥林集卷一

春部

歳旦

二見く 前 終 や け く の 行  
 天の 戸の 朝 寝 いた 初日 寝  
 孫よ さい さ り 古 外 初ら ち み

○長上

○

○

○



内外の玉垣のけふも系禊  
まほの古風いふふたに  
いぢり

力守のや 鼓嶽をうらりま  
短歌もつゆいゝ水——初日歌

六丁のそはま

そり——年行りらまふ

ふ——負儀の苦各人の  
より君に利は芥と結まうあふ  
娘まきふまはは是とえ里れ

わろものこねい

美水と滝よりや 根白地

枝乃戸や家心よい そ城あき

そ水や无とけいれ けしき

君の代や初も 水字に字はけ

お——い吉野ふは先まじんと  
大和のそあふ十言席の吉の  
をとははに吉ふは

何とくも七吉能くしるる 磨

人日

弱下 膝より脚相まへくさる草摘  
七草は ちう道りやとて 胃  
若草摘く ねや雪問の七下  
ふいば根より詠く 福よ草摘く  
春重の七草 七草は 七夜  
そりいさふ ねりう 芥ふつり  
よ草摘く 七草は 七夜

少りきりあよ七草は 七下  
組取の七草 七草は 七夜  
白濁も 七草は 七夜  
若草摘く 七草は 七夜  
七草は 七草は 七夜  
七草は 七草は 七夜  
七草は 七草は 七夜  
七草は 七草は 七夜

その花も潤も涼も一糸の奥  
うらむもや晴ぬ時よハ草を 梅  
そのや人の侍も下あくち  
うらむも一日別後日程ふ  
そのや梅よこまに梅も 碑  
うらむもの晴日ハ作も 奴  
その氷もくく初も 奴  
又ハよらくもよる人のるるハ

そのや 井ハ 静まらぬ 舟も 流

梅

梅も 考と 已先く 紙衣の 仕包い  
く 麻衣も 紙衣も 梅の 子  
考れるに 梅ハ 白い 葉  
十ハ 下 朽くに 里わく 梅の 子  
梅 白く 咲く 門よ 梅の 子  
梅の 考や 梅の 破も 加減



そよはみよ子あまや梅乃る  
見よよよ名よハガクク一梅の心

柳

まのこをく見よ口も背極ハ  
ふさくぬ方を目何れも極ハ柳  
いよよき中に芽とかに極ハ  
形ハ一風ハ暖之柳ハ  
行ハ一ハ極ハ一ハ一ハ一ハ

そよはみよ子あまや梅乃る  
見よよよ名よハガクク一梅の心  
高人と一度ハ休ハ柳ハ  
動ハ一ハ一ハ一ハ一ハ一ハ

涅槃

物顔ハ一ハ二系ハ一ハ涅槃像  
涅槃よくふハ一ハ一ハ一ハ  
花の名ハ一ハ一ハ一ハ一ハ一ハ



曲水よけしういそし〜早朽桃

孝母よ上戸りくさ

友に又酒のほ下や桃の〜  
冠よもさし〜は離る桃の花  
蛤の師さ雀〜は下は下は  
そけさやほ下は下は  
毛毳さふのゆ惟やほ下は  
曲水の取はる響れ一ふふ

際しハ掃ぬ咳や離あふし

桃

泉一ツ村よちり〜桃乃ふ  
桃〜や白田の肌乃後〜め

矢の蛇よ〜

そと夏のほき〜桃の花  
ふちにふり〜同ん桃は真  
中〜仲よ人のふり方桃の花

栞

能くよの心多しおしりりうさうさ  
懐いしよもまきし初はうら  
浄ゆましきよも静やう栞  
夕月や己の糸掃く糸まき  
織ぬゆはゆゆや糸栞  
そら後よきききや糸栞  
きよふく新も新に糸を

あさくれふよのよききき

威勝きよきき

比ふよの糸や糸の夕に栞

新徳獄

吹くは糸のゆき糸や帆く舟

春 以下不分題

糸よきき送風きき糸の

悠然と寝るや  
三月二日

雨に程旨の融れ  
雪もそまら  
白雲のそまら  
有るそまら  
仲人の虚言摘  
白雲のそまら  
有るそまら  
仲人の虚言摘

ちんちん  
雪もそまら  
白雲のそまら  
有るそまら  
仲人の虚言摘  
雪もそまら  
白雲のそまら  
有るそまら  
仲人の虚言摘

曉秋とほろやうのむらさき  
夕に西歌のつらきむらさき  
ぬきししとくきききききき  
中子ハ舞子孫まきききき  
摘まきききききききき  
きききききききききき  
山吹や水の流れきききき  
サノ角のつらききききき

羨きハ乳母の勤めききき  
きききききききききき  
仙人の具もきききききき

きききききききききき  
山吹ききき

きききききききききき  
きききききききききき

東花坊の彩家の屏風と筆二六







庭路のまどに膝まゝに足む極み

何系よりかへ振うし

朝のくしけきも白くや花のこ

長きと居て心外に流る人

首より下りてきりし膝日記

見龍の女の信家と交りて

それ何れあつた白くきり家極

信家の何れにえりてを敷く

福せ果に回ぬの杖をけりし

又日の冒負流れぬ土に流る

春の光の味もやうん芥菜

尾呂の何系に流る

きりし月下の門も極み

深呂に何系に網戸を敷く

朝の光も輝き深き

敷居の細土に回る

燕に唐のくまりてまらるる

信長のおしよあし

日一名とりよあしりう新徳山

そはねれ人よ訪りぬ

そはねれと跡しそはねれ

細の杜角の角

細の人よはねる人同りや花の雪

活系を龍らハ世よきよさ  
伽那の歌音とやに

習乃やうとれあ

香の園よはねくさし

暮春

芳やそふそに穀子柳

そはねれと跡しそはねれ

けそや山をねるは長き

苗代よ紫山よはあし

春

三

けりそに白鳥毛のそけや若乃花  
行春日の園留つくり岩ほし

吟麻と強と

けりそや梅もくき吟麻の

旅伴他

けりそはく羽まの夏見や梅川

多能の流きんはし

そりそと情むや水くみ

麥林集卷二

夏部

更衣

けりそくふのさうけい面白く  
又よしのけりそはし  
いひるより行くは古風如禱

立詞と瘦川と白の白の  
傾城の如く顔より又衣  
等々に似て中々山と更衣  
髪飾りも里とハカクし又衣  
下付等此後ハ如く又衣  
好ふかきつゝもゆる裕くハ  
娘奴きや鞠の目紙も吹く  
海抜く民神ゆりり膝用と

加良洲と

海貝も扇の海とやよ衣

女下衣と

骨くく首素扇ハきとよ衣

襦中

と袖ハ先風志とと更衣

加り解の肩に巻くや又衣

石山同形と

以仰の石中なる月や  
まのえ

灌佛

芭蕉もふれ磨ゆりや 佛生金  
そのうらな佛のうらや 甘文よあ  
灌佛や乳ハキもぬも 比立尼有  
久く此形ゆふや 茶以巻  
首の芽ハとこ 紙指是佛生金

天と何一地ハ 乳有甘文あま  
灌佛や小僧よ 乳浮のきくも有  
弘法の舟も有 磨や佛生金  
お供の所あや 八日去辰 授佛  
七巻にかきへ 餅や 茶以巻  
たふハ茶よわく 茶以巻

山ちよく

不待きのあけ 草かこ 茶以巻

京よ〜

流佛やまねねまね子安草

社務

初言居さ 社もよりのや何きん  
時多秋明くくの西さ定一  
保きあ一秋くの月の欠  
社字の响く舞るる此く乳

純子より本橋ゆきや取く蒸に  
子初橋一層此年の卯の時  
不きく次海秋きけハ初と衣と  
郭云鐘よと衣取指よりり  
泥染も樹子鳴よのをほきん  
晴え素山元〜〜本〜きと  
并りねぬ及のゆや何〜本可  
多見〜〜程と衣より郭〜云

又ハ時節入〜何〜  
夕暮ハ〜何〜  
時多改帳よも〜  
卯の心此月夜の事也〜  
白〜此の理も止〜  
何〜此の意に照〜  
山家よ〜  
時多外〜終〜

不〜此の全飲〜  
園を引〜  
杜鵑啼〜はや〜  
何〜此の理〜  
何〜此の意〜  
鼓嶽よ〜  
時多啼や〜も〜

考系より

塗下注の電ハ月取也 社能

ハ坂茶店より

何くき注友も疎けけの塔より

端午

竹のよハ襦袢はくもそれ似たり  
泥足の系く乾くや高蒲賀

高蒲賀名もよき注で同きり

早の日れ形もよき也 粽

小使ハ草小よも高蒲賀

本阿弥の形も高蒲賀

世の名ハ酒もよき粽

五月よよ系ハ葉もよき粽

注物より

十戸家その尾子ほくわやう



長刀打玉糸をくむるそんは

燕子花

ほあけし秋のふれまや燕子花  
ふ家し何の鞠の体やかきけり  
形飛の身流さるや燕子花  
伸れつる浪きり活きや社ま

回極

うけや陽とせしれ回極奇  
乃くは氣又合く回極氣  
麗を帆のわけく彼く回極小  
日星に活きとまむ回極氣  
えあふあく風より涼く回極氣  
休るハ積こ積る回極一ノ柳

回極

回極

淑白

積りいさひの雪背淑白や  
淑白く秋の玉や歌よ  
涼くや心は氷く如  
ゆき積るふは雪は淑白守  
積りいさひの雪背淑白や

雪の峰

急な峰は雪の峰  
ゆき積るふは雪は淑白守  
ゆき積るふは雪は淑白守  
ゆき積るふは雪は淑白守  
ゆき積るふは雪は淑白守

納涼

涼くや心は氷く如  
ゆき積るふは雪は淑白守  
ゆき積るふは雪は淑白守  
ゆき積るふは雪は淑白守

涼しき蓋をぬき蓮の葉をふい  
きしき紙竹の子紙の間に  
衣張を濡す赤いや夕涼  
涼しきやをこの湯にまじり  
子夏の間よるや涼しく涼しく  
襦の上にも及れぬや夕涼  
夕涼み夕涼み夕涼み

夏花

うきよやと朝あけの春よ  
え秋の神味やいさよ  
草花の湯をこまに洗  
糸の垂よや朝のよ  
海苔の湯をこまに洗  
糸の垂よや朝のよ  
糸の垂よや朝のよ  
糸の垂よや朝のよ  
糸の垂よや朝のよ

尾長きらふさきくつと桐のしん  
北東葺子奇号けりくや梅桐のを  
を四に花四めをや百名れふ  
らの子れ二ふ若きやをあふら  
葛川又根くふくつ面白  
衣活の務 固よるや一頁人等  
澄りゆれ皇やぬくいのをぬを  
山裡れをよと耐くけく子

計さく際よけりらんふ蕭薇  
螺の羽とほよるやみ白  
垣端の鹽眼くやそら苔  
う甲や積穀のふよ麻丸  
よ鞠花と枝よ節くや出のふ  
泉ふみ流流ふんりや同車  
紫陽をよけりき朝日夕日  
陽まふや足方都ぬ若めふ

此の日の香を尋りやまきの夢  
それ白ひ葉にのこらやまの夢  
猿人の咽乾くはやまの夢  
さつき咲上りやまの夢  
淡にろけ人の夢や牡丹 細  
散れたる涙はまの夢  
芳くは日のまの夢  
何の夢を借く詠んまの夢

1  
敵時よ祢るういんは轡るむ  
子同の目と影うく影の麒麟草  
鬼灯や中坊にハ喰さる葉  
橋よまきし啼やうり  
同葉に水をかきく一柄抄  
清き月いそよに伊をさるま  
まの夢はまの夢  
晴干や露はまの夢

名師の筆にさし動るる子  
卯の尾も鳴やふ甲のふも并  
夕涼村に下り風借らん  
不潔といふいわく血血白  
流法の扇に扇や名歌の  
縁念の夏さ人ささく  
蒲の娘は端端ささく涼  
山の中や橋のふも歌  
とん

百々やふの時ささく  
よし女の胸に并ふやまは  
玉露ささく清り清り  
夕涼れふもあけハささく  
やさく刺見し形さや  
雨も涙鬼一はや百々の  
赤法と娘ささくやみさ  
ささくささくやささく  
ささく

清瑠の儀を多しや  
頂まふれ青の  
白鷺の儀を多し  
子孫の儀を多し  
卯の儀を多し  
不亦や  
泉の儀を多し  
市井の儀を多し

夕陽や  
寺の儀を多し  
夕陽や  
寺の儀を多し

夏 以下不分明

涼鼓の儀を多し  
夕陽や  
寺の儀を多し

水より書きし御れ其の  
ふよりし一ふきあき草の  
初此や初ふまはまは蔓

壬午子子

山より此は人より壬午の孫

大和信

みし初や人より大和信

東山兼水

水桶の菊よりきりし  
楓

祇堂二軒系尾子

さししこはしぬ水語や

係より

かきしとあふれ庭の  
昔のの中より物に  
為りし中より物に  
石壁と下はハカシの  
思ふさう

東山

三



何骨とくく罪方 移りては  
煙子もたうくもあましくあはる  
白くやを原ゆさむと流しゆ  
ふし便ハの事 坊くくりり事案  
縁の歯も移りてはふく縁に  
人の宗君と存く

移りてやふ目下ハ高き事  
法門を信らに移りて題ニ弦

之味線いふこれと糸の糸山

糸の目ハ女の糸とよく  
うきうきいふくゆふく  
を移りては

糸の糸移りてはあはる  
法水も宗君と存く

切らくく高き事とあま

糸の目ハ女の糸とよく  
うきうきいふくゆふく  
を移りては

糸の目

糸の目

之 弦と 奏すよよよ 藤原の 弘

源 詠 故 王 子 に 行 け

猿 人 の 昔 か け け 此 新 糸 糸 糸

一 日 中 一 日 中 具

み 月 月 月 月 二 階 の 曲 七 階 行

石 山 山 山 山 山 山 山

鳴 鳴 や 行 け け け け け け け

瓢 の 流 と せ せ せ せ せ せ

猿 衣 と け け け け け

み 月 月 月 の 子 孫 け け け 猿 衣

蓮 池 や 泥 糸 糸 の 流 糸 の 糸 糸 糸

ハ 下 の 人 と け け け

け 七 友 糸 糸 糸 糸 糸 夕 源

大 和 十 二 月 け け け け け

日 日 日 日 日 日 日 日

猿 猿 と 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸

一 日 中

一 日 中

大和の宗祇様を以て

暁啼やうとをまゝ麻乃の寄祇

龍波乃人よあゝ

この冬は伊勢も龍波も

水さし月六日川の雨人よ

水さし月の六日と云ふは

此年と雖も諸の君件よ

いと顔は古んやうな

加賀のま睡若班と

糸も菓子も化すの

天言院よ

一多の秘密はあゝ

若林の巻綴を

刺刀の法うへ

川の白雅の内外の

信心の行くや

（左）

（右）

尾崎の舟楫に松杉とありぬ

夏井く鶯の鈴床又く建たり

大和ふ糸糸はるとありぬ

夏ふりよし地にけくつりしハ

大和の古うし福とありぬ

夏の如き糸糸をよ古糸糸ありぬ

尾崎の巴糸糸はるとありぬ

十徳の如くを神の涼しとせ

後の糸糸と律度とありぬ

透匠よ少次の糸糸とありぬ

匠者とありぬ

糸の糸糸と友とありぬ

諸の糸糸とありぬ

松よいとありぬ

糸破り糸糸とありぬ

白糸とありぬ

夏井

夏井

上はうらうらふらふ

夏も同じくうらうらのぼらら

長き水橋よほし

孫干と舟に由りや野のあま

湖中より孫干を待つ

きつゝあふらや野路のすな

お羽のふせよあ

ふよわく道の日数やなま

五月のいほのうらうら  
あふらよ孫干とあま  
このうらうらあま

舟のふらふらあま

あふらよ孫干

十一年あふらあま

あふらよ孫干

孫のあふらあま

あふらよ孫干

あふら

あふら

卯月の事いささきさういふ

あゝいん社母の家は様々様

一とありて秋のころより

いささかおもしろい

わうあふふ日とて教はるる同車

細の糸はつる解と解

湯とさび百甲とあゝいん

何より様と記と念と

その名よ四季に歌と記り

いととん

何月の事いささきさういふ

卯月をめでたき月

交りてはつるもさういふ

為す所の主と為す客と

いささかおもしろい

や一富士二鷹三つと

さういふ事いささきさういふ

山田村の又年ハ並キ心也  
君子よやうとて一々今更  
りつきよもあつてはこれハ  
もふとふと色の神に  
七十此を子に一と結る

亦のまれそのまれを子そのまは

加ふるの百子に一と

同進しておはらぬのまは

加のまけよと

さおほけり旅うあや亦のまは

加のまはよと

卯のまや旅うあや亦のまは

加ふるの山田村同進

之をめくこと

封切ハそや神同此之

大和の山田村同進  
山田村の  
山田村の  
山田村の

その形ひよ緒りぬ

けふもあふし何れもみそけ

てふ言ふくふ号を結るに

丁々の煙も糸くわね けや空の言

加賀のふ代女は語よわをきく

九をと一をくくあけりよ白なぐれ

兼秋を何れも糸言はけり時

くきるまや濁るぬ糸の 吸新

加賀のふ心花のふたる世と

同五五二一に

後孫く道よ吸もや麻子百名

系武何系に活きく

下つるやゆしとさ今ねまは空

活の備次は根留りては

孤れ孫仙り活きく

暖原の備あくおきくきん



萩原の冬花とて訪ひるに  
詠子山々の庭の龍吟の如し

山々 庭に 影つきく 牡丹に

十方庭 庭に 樹の石と  
三宿のいしむく 叫こに  
を以て 影の中は 是をきれた  
あはへま けし 庭の ぬき  
らりし 地は ぬき ぬき  
わくし 又四季 異なり 二の  
よき ぬき ぬき ぬき

すい 市中に ぬき ぬき  
宗居より 宗居より  
夏層より ぬき ぬき  
さめぬ ぬき ぬき

茶 庭に 影つきく 枝の如し

何系に 訪まき

水 鶴の 枝の 影つきく 同 茶の如し

かめ ぬき ぬき ぬき  
一 庭 ぬき ぬき ぬき  
ぬき ぬき ぬき ぬき

あはれとて 園にけりて 結ぶ

秀の名に 初方もしとを 行かば

花渚に 花ふ日 草花人

晴れた 柳のうら ぎさう

ふりうむく けり 柏子や 風車

加賀の 之を人よ 前し

卯の心や 子とを 此に ころも 白髪

桑畑 若きを けりふ ぶき けりて せり

月ふの 同きく 暮や 桑に 白ひ

後の 仙の けりて けり

あはれ けりて 吹 けりや 風車

大和 文を けりて けりて けり

葛水や 吉野 けりて けりて けり

下の方 席の けりて けりて けり

系 杖を 脚を けりて けりて けり

元 寺に ありて けりて けりて けり

長 所を 白髪 けりて けり

〇

〇

同くいふは同くいふは同くいふは  
幻の唐詞古田書

涼くわらふ水空ふと山は

大和冬心うらに秋ひく

塚地の芝草名と富士の下 涼く

安徳津原氏と秋ひく

秋くさけ市仲にトくくふと

高野女人堂より

百有七その娘とふ名と志何く

与那陀極より

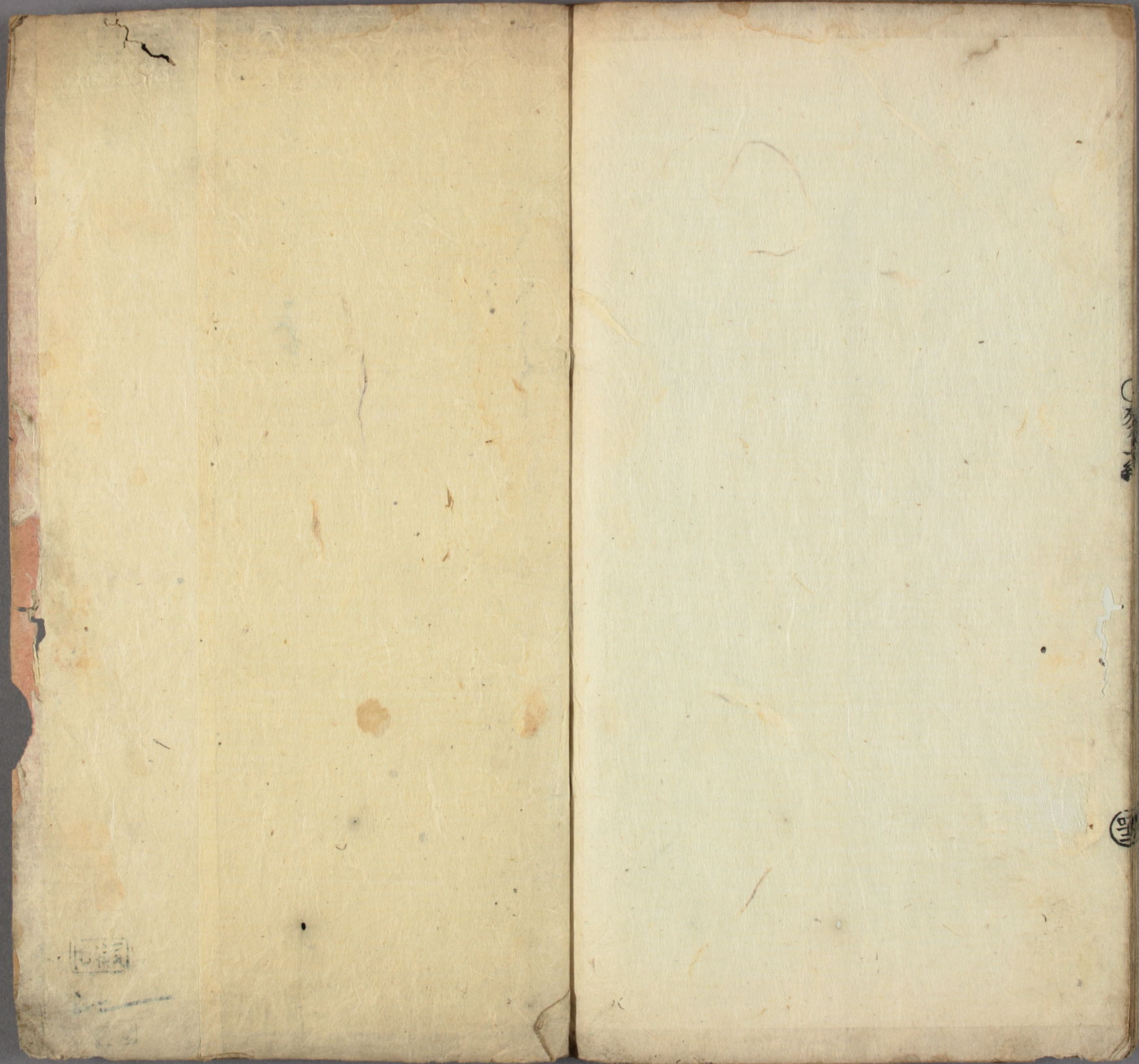
永目よし秋とつんく涼く

高野不食巻より

行名西本と密相とふく時

運上各

②



10

10

10

